

V 果樹

実況

8月は日照時間が207.3時間で平年205.1時間と同等であった。降雨日数は14日で平年(=8.9日)よりかなり多く、全体の降水量としても平年より64%多かった。7月21日から8月21日まで真夏日が連続した。最高気温極値は37.3℃(7日)で、猛暑日は14日までで8回記録されたが、15日以降に猛暑日はなかった。月の平均気温は平年比+1.1℃で高かった。最大瞬間風速15m/s以上の強風は15日(台風10号)23.9m/s、29日(福井県沖の前線吹き出し)19.5m/sの2回が記録されている。

9月は8～9日の台風15号で千葉県に大きな被害が出た。日照時間は170.9時間で平年の144.4時間より18%多かった。降雨日数は8日で平年(12.8日)よりかなり少なかった。降水量は平年より69%少ない62.0ミリにとどまった。真夏日は14日あり、最高気温極値は35.9℃(8日)で、猛暑日は2回(7日・8日)記録されている。最低気温極値は14.6℃(20日)。月の平均気温は平年比+2.0℃で高かった。最大瞬間風速15m/s以上の強風は23日(台風17号)25.6m/sの1回のみ記録されている。

[以上、福井地方気象台観測データによる]

1 ウメ

(1) 生育状況 (園芸研究センター)

モンクロシャチホコの食害が確認されたのは9月上旬からであった。イラガの発生は平年より少なかった。ウメシロカイガラムシ第3世代幼虫は、発生が少なく、産卵・ふ化の最盛期を確認できなかった。

(2) 地域状況

二州管内におけるモンクロシャチホコの発生は、9月上旬以降に若狭町三方地区を中心に拡大している。

2 ナシ

(1) 生育状況 (農業試験場)

「幸水」の収穫は、8月16日(前年8月13日、平年8月15日)から始まり、8月27日(前年8月21日、平年8月29日)に終了した。果実横径は、前年よりやや小さく、平年並みであった(図1)。糖度は11.4度で平年より低かった。

「豊水」の収穫は、9月3日(前年9月3日、平年9月4日)から始まり、9月10日(前年9月12日、平年9月16日)に終了した。果実横径は、前年並みで、平年より大きかった(図2)。糖度は11.7度で平年より低かった。

黒星病の発生は少なかった。

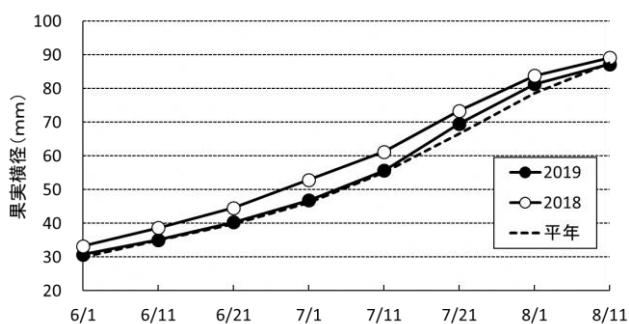


図1 「幸水」の果実肥大(福井農試)

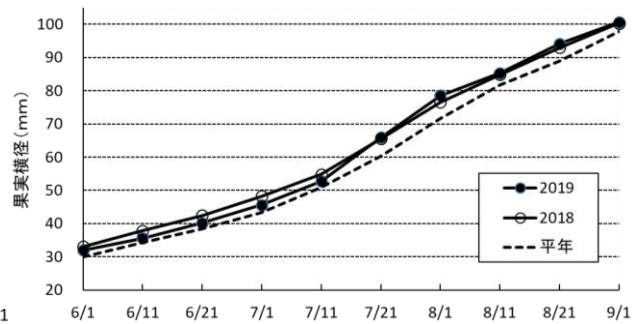


図2 「豊水」の果実肥大(福井農試)

(2) 地域状況

坂井市三国・あわら市では、「豊水」の集荷が9月4日から始まり9月30日に終了した。大玉傾向で、集荷量は昨年より少ない見込みである。「あきづき」の集荷は9月17日から行われている。

若狭町では、「豊水」・「二十世紀」の集荷が9月6日～26日に行われた。

3 カキ

(1) 生育状況 (農業試験場)

9月21日現在の果実肥大は、果実横径で「刀根早生」が78.4mm(前年80.4mm、平年78.9mm)であり、前年より小さく、平年並みで推移している。「平核無」は78.6mm(前年83.2mm、平年79.5mm)であり、前年より小さく、平年並みで推移している。

「刀根早生」の収穫は、10月上旬からの予定である。

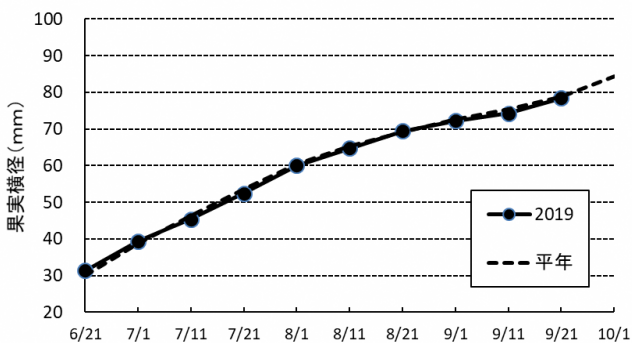


図3 「刀根早生」の果実肥大(福井農試)

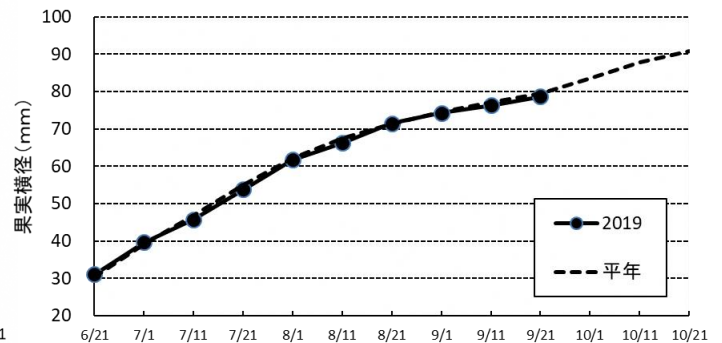


図4 「平核無」の果実肥大(福井農試)

(2) 地域状況

あわら市における9月19日現在の果実肥大は、果実横径で「刀根早生」が77.1mm、「平核無」が75.6mmで前年・平年より小さい。果実の着色は、前年より遅くなっている。

「刀根早生」の集荷は、あわら市で9月28日、南越前町(南条)で10月5日、若狭町で9月30日から開始されている

4 イチジク

(1) 地域状況

若狭管内では、9月20日現在、11～14節の果実を収穫している。

5 ブドウ

(1) 生育状況 (農業試験場)

露地栽培の収穫期は、「サニールージュ」が8月16日～23日(前年8月15日～21日)、「ブラックビー ト」が9月2日～9日(前年8月21日～27日)、「藤稔」が9月2日～9日(前年8月21日～27日)、「シャインマスカット」が9月27日から始まっている(前年9月6日～28日)。

(2) 地域状況

ほとんどの品種の収穫は、9月下旬でほぼ終了した。

対 策

1 各樹種共通

(1) 土づくり

果樹の高品質・安定生産のために土づくりが必要である。土づくり作業は、天候が不順になる前に計画的に進める。本県は有効土層の浅い樹園地が多いので、有機物や土壌改良資材を投入しながら深耕し、土づくりを行う。

地下水位の高い園では、深耕に併せて排水対策を実施する。

未熟な有機物を施用すると、有機物が分解される過程で植物体への無機態窒素の供給が一時的に減少(=窒素飢餓)したり、紋羽病を発生させたりするおそれがあるので、土づくりに用いる有機物は十分に腐熟したものを選んで用いる。

具体的な深耕方法としては、トレンチャーなどで樹列と平行にざんごう状に溝を掘る方法、幹を中心に放射状に掘る方法、ロータリーオーガなどでたこつぼ状の穴を掘る方法がある。溝およびたこつぼ穴は40cm以上の深さが望ましく、穴には有機物の他に石灰質資材・ようりんなどの土壌改良資材を混ぜながら埋め戻す。年ごとに深耕位置を変え、数年かけて圃場全面の土づくりを行う。

(2) 植え付け準備

今秋から来春にかけて新改植を予定している場合は、10月末までに植穴の準備を進めておく。植穴は、大きさ1m×1m、深さ50cm程度を掘り上げる。掘り上げた土の山に完熟堆肥またはバーク堆肥20kg・ようりん1kg・石灰類1kg・3要素入り肥料500gをふりかけ、山すそ部分から切りくずし、資材と土を十分混ぜ合わせながら埋め戻しを行う。また、植え付け後の沈下を考慮して地表面より中央部がやや高くなるように埋め戻しておく(図3)。

落葉果樹では11月中旬頃、かんきつ等の常緑果樹では降雪の可能性がなくなる3月頃に苗木の植付けを行う。植え穴の中で土づくり資材と土がなじむように、植え穴の埋め戻しを行った後、植付け時期まで放置しておく。

(3) 新植・改植

収量や品質が劣る品種は、早期かつ計画的に、経済性が高い有望な品種への新植・改植を進める。なお、樹種や品種によっては売り切れになることがあるので、早めに苗木を注文しておく。

改植では、計画的に伐採・伐根、排水対策、堆肥施用による土づくりなどを行った後、前項に従い苗木を植え付ける。また、伐根をできるだけ丁寧にして、植え付け位置は前作から可能な限りずらすように配慮する。

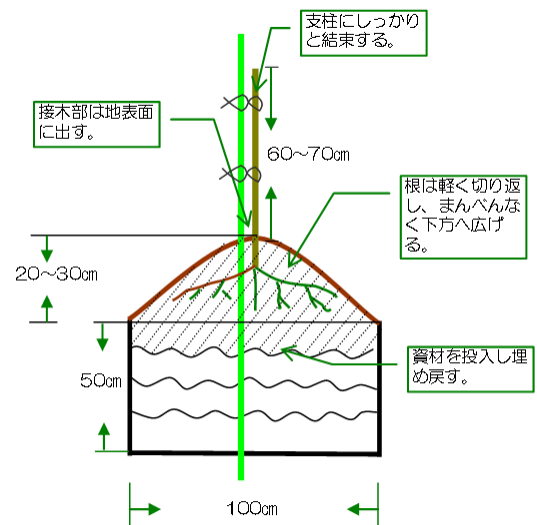


図5 苗木の植付け方法

2 ウメ

(1) 病虫害防除

黒星病に対する秋季防除は、越冬感染源となる枝での発病を抑え、翌年の着果期の防除効果を高めることが分かっている。本年度黒星病が多発した園では、越冬する病原菌が多くなっているため、サ

ルファーズルにより防除を実施する。ただし、高温時(28℃以上)の散布は、薬害を生じる恐れがあるので、避ける。

(2) 高接ぎ後の新梢管理

接ぎ穂から発生した新梢の誘引がまだ実施されていない場合は、ゆかしている接ぎ木部が剥がれないように注意しながら、接ぎ木台(紅サシや剣先)に誘引する(図4)。なお、誘引ひもを旧年枝に結び付けて、新梢を誘引している場合は、随時、誘引ひもの位置や誘引角度を調整するとともに、旧年枝を切り縮めていく。

誘引後、新梢の長さが1.5m以上で基部が褐色になっているような強勢な新梢は2/3~4/5程度(100~120cm)の長さで、エンピツ程度の太さの新梢は60~80cmの長さで先端を切除する。長さ50cm以下で伸長がよくない新梢はそのままにしておく。

接ぎ木後2年目になると、多くの新梢が勢いよく伸びてくるので、長大な新梢はすべて発生基部から切除する。先端から2~3番目に発生し、枝断面の水平方向からやや上向きの新梢1本を主枝候補として残し、80~100cmの長さで切り返す(図5)。旧年枝を土台として発生した30cm以下の新梢は、おおよそ20cm程度の間隔で横向きの枝を残し、次年度の結実を確保する。

(3) 秋季せん定

せん定は遅れないように計画的に作業を始める。

ただし、葉は落葉間際まで光合成により、来年のための養分を樹に蓄えている。せん定作業は樹勢の強い樹や「新平太夫」・「福太夫」を優先し、樹勢の弱い樹はできるだけ遅らせて、葉数と着葉期間を確保して貯蔵養分を蓄積させる。また、花芽の着生が少ないと判断される場合は、切り過ぎに注意し、短果枝や中果枝などの結果枝をできるだけ多く残し、花芽数を確保する。

3 ナシ

(1) 収穫後の防除

ナシ黒星病の感染条件は葉の濡れ時間が8.8時間以上、最適温度は18.5℃とされている。感染適温の出現時期は平年で9月下旬から10月上旬である。この時期に降雨等で葉が濡れている時間が長く続くと感染が拡大する。越冬病原菌を減らすため、この時期に予防的な薬剤散布を実施する。また、落葉は翌年の発生源となるので、園外に持ち出して焼却や埋設などの処理をする。落葉処理は、落葉中期と後期の2回に分けて実施する。

ハダニ類・シンクイムシ類の発生が多かった園では、耕種的防除として主幹部にコモやワラ・クラフト紙等を巻き付けておき、早春に回収して焼却駆除する。

(2) 礼肥施用

礼肥をまだ施用していない園では、施肥基準に準じて速効性肥料で年間窒素量の20%を早急に施す。

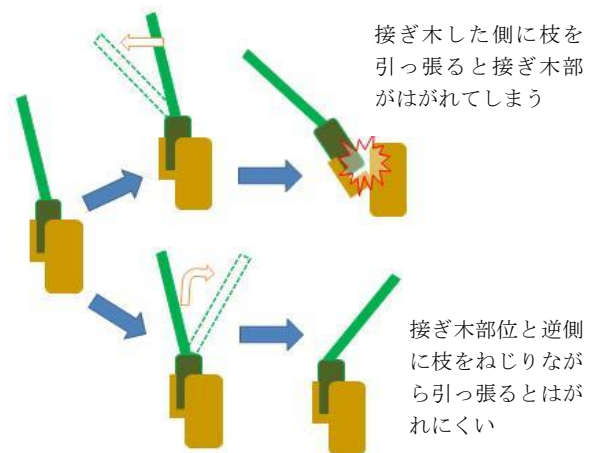


図6 誘引する方向(切り接ぎの場合)

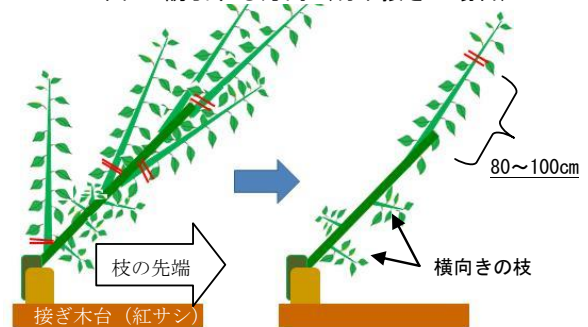


図7 新梢先端の処理

(3) 秋季せん定

受光態勢を改善して翌年に利用する枝の芽の充実を良くするとともに、せん定した切り口の潜芽の動きだしを良くして、優良な側枝を確保することを目的に粗せん定を開始する。ただし、10月中下旬は落葉前せん定となるので、樹勢の強い樹に限って実施する。樹勢の弱い樹、ハダニ等により落葉が進んだ樹、受光態勢のよい樹では、かえってマイナスになるので落葉を待ってから作業を開始する。

4 カキ

(1) 枝の補強

果実肥大が進むと枝が垂れ下がり、果実の重みで枝が折損することがあるので、下垂程度の大きい枝を中心に、ビニールバンドによる吊り下げや突っ支え(つかえ)棒による枝の補強をはかる。

(2) 収穫

「刀根早生」や「平核無」など脱渋柿の糖度は、脱渋後で13度以上が必要である。

果皮の着色程度が熟度の目安となるので、カラーチャートを指標にして収穫する。「刀根早生」、「平核無」の収穫適期は、カラーチャートで果頂部5.0～5.5、へた部3.5～4.0が目安となる。収穫前半は果頂部、後半はへた部の果色を重視して、これより着色の進んだ果実を選んで収穫する。

カキの果実は、タンニンを多く含んでいるので、収穫の際に果皮に傷がつくと黒変する。黒変を防止するため、果実表面が傷つかないように、収穫時に果梗を基部まで短く切り戻す。また、収穫カゴの内側に布を張って使用するなど、細心の注意で果実の保護に努める。

雨や朝露でぬれた果実を収穫すると、汚染果の原因となるので、果面が乾いてから収穫する。

果実温度の急激な変化やムレは軟化の原因となるので、収穫後の果実は、直射日光を避けて風通しのよい場所で保管する。

(3) 脱渋

収穫した後に長時間放置した果実は渋抜けが悪くなるので、収穫後すみやかにガス処理できるように配慮する。

C T S D法では、果実温の上昇予措(果実温度を均一にする)を確実にを行い、炭酸ガス濃度・処理時間・処理温度などの条件を厳格に守る。炭酸ガス処理が終わったら保温し、48時間後に脱渋程度を判定する。脱渋が不完全ならば更に保温を続ける。

小果は大果より脱渋反応が遅れるので、サイズの大小による脱渋程度のちがいに注意して、出荷・販売を行う。

(4) 礼肥施用

樹の貯蔵養分を多くして、翌年の発芽や開花結実を良好にすることを目的に、10月中下旬に速効性の肥料を礼肥として施す。

5 イチジク

(1) 水管理

イチジクの果実は、成熟に伴って急激に水分を吸収して肥大する。気温が低くなると葉からの蒸散量が減少するため、かん水量が多いと果実の水分含量が増加して果実は大きくなるが、糖度は低くなるので、かん水が過剰にならないよう注意する。

(2) 収穫

収穫適期は、果皮色、着色面積割合、果実硬度から総合的に把握する。時期により適期基準は変化

するので、収穫後期には果面全体に着色し、果皮色が十分に濃くなったものを収穫する。また、やや硬い果実でも収穫が可能となる。

(3) 秋肥(礼肥)施用

果実生産によって低下していく葉の同化機能を回復させ、貯蔵養分を増加させるために窒素成分量で2kg/10 a を10月上旬に施用する。

6 ブドウ

(1) 礼肥施用

収穫後の樹勢回復と翌年の貯蔵養分蓄積のため、速効性肥料を窒素成分量で1.5kg/10a施用する。施肥量は、樹勢の強弱を観察して調節する。

(2) 秋季防除

越冬病原菌密度低下およびブドウトラカミキリの防除のため、10月中旬までにICボルドー66Dおよびスミチオン水和剤40を混用散布する。